

ヨハネの福音書 (49)

「大祭司の祈り (1) イエス自身のための祈り」

ヨハ 17 : 1~5

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
- (3) イエスの私的奉仕 (13 : 1~17 : 26)
 - ①最後の晩餐 (13 : 1~30)
 - ②階上の間の説教 (13 : 31~16 : 33)
 - ③大祭司の祈り (17 : 1~26)

2. 注目すべき点

- (1) 弟子たちへの教えは、勝利のことばで終わった。
 - ①「わたしはすでに世に勝ちました」(ヨハ 16 : 33)
 - ②十字架、復活、昇天が予見されている。
- (2) この段階で、イエスの働きは預言者から祭司に移行した。
- (3) ここでの祈りは、聖書の中の最高の祈りである。
 - ①イエスの心の中を明らかにした祈りである。
 - ②人間が創作できるような内容の祈りではない。

3. アウトライン (大祭司の祈り)

- (1) イエス自身のための祈り (17 : 1~5)
- (2) 弟子たちのための祈り (17 : 6~19)
- (3) 将来の信者たちのための祈り (17 : 20~26)

今回は、(1) を取り上げる。

大祭司の祈りから教訓を学ぶ。

イエス自身の祈りから、信仰の本質について学ぶ。

I. イエス自身のための祈り (1~5 節)

1. 1 節

Joh 17:1 これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

- (1) 「これらのことを話してから」

- ①ヨハ 14~16 章の弟子たちへのメッセージを終えてから。

②場所は、ゲツセマネの園の近くであろう。

(2)「目を天に向けて」

- ①私たちの場合は、頭を垂れ、目を閉じて祈ることが多い。
- ②しかし、旧約聖書には、そのような祈りの姿勢を記した箇所は存在しない。
- ③旧約聖書の祈りの姿勢
 - *手を上げて祈る。
 - *ひざまずく。
 - *地にひれ伏す。
 - *立って祈る。
- ④イエスは、天に向かって顔を上げ、手を挙げて祈られた。
- ⑤これは大祭司としての祈りの開始点である。

(3)「父よ」

- ①「パテラ」。親密で人格的な呼びかけ。
- ②イエスは、合計 6 回、父に呼びかけている。
 - *「父よ」 1、5、21、24 節
 - *「聖なる父よ」 11 節
 - *「正しい父よ」 25 節
- ③イエスの祈りは、直接父なる神に祈るものである。
- ④信者は、父なる神に対して、イエス・キリストを通して、聖霊に導かれて祈る。

(4)「時が来ました」

- ①「ホウラ」とは、定められた救いの計画の時、十字架の時である。
- ②それまでは、「時」はまだ来ていなかった。
 - *イエスの敵は、イエスを逮捕することができなかった。
 - *ヨハ 2 : 4、7 : 6、7 : 8、7 : 30、8 : 20
- ③今、イエスの時が来た (完了形)。
 - *ヨハ 12 : 23、13 : 1、17 : 1

(5)「子の栄光を現してください」

- ①イエスの心の中を見ることができる。
- ②十字架という苦難が、実は神の栄光の最高の現れであるという逆説的真理。
 - *父がイエスの犠牲の死を受け入れること
 - *父がイエスを復活させること

*昇天によって、イエスが栄光の座に着くことに

(6) 「子があなただの栄光を現すために、」

- ①原文の語順に従って解説している。
- ②イエスは、自分の願いの目的を明らかにした。
- ③罪人が新生し、神をたたえるようになることは、父に栄光をもたらす。
- ④イエスの祈りは、三位一体的協働の枠組みで理解すべきである。

(7) 1 節から得られる教訓

(例話) 他者のために祈る祈りに感動し、信仰に導かれた人のエピソード

- ①自分のために祈ることは、利己的なことではない。
- ②利己的な祈りとは、自分の繁栄だけを求める祈りである。
- ③他者のために祈る前に、自分の心と行いが神と調和している必要がある。
- ④自分のための祈りは、楽器の調律と同じである。
- ⑤魂の調律が終わった人は、効果的な祈りを献げることができる。

2. 2~3 節

Joh 17:2 あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。

Joh 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。

(1) 父は子に、すべての人を支配する権威を与えた。

- ①詩 2 篇のテーマ (メシア的詩篇)
- ②父は子に、裁きを行う権威を与えた (ヨハ 5 : 27)。
- ③子は、父からいただいたすべての者に、永遠のいのちを与える。
- ④信者は、「あなたがくださった」人である (同じ表現が 5 回出て来る)。

* 2 節、6 節 (2 回)、9 節、24 節

⑤救いの教理の二面性

- * 天地が造られる前から、父はキリストに属する者を選んでおられる。
- * 神は、すべての人を招いておられる (信仰によって救われない人はいない)。

(2) イエスによる永遠のいのちの定義

- ①パリサイ人たちは、神の国に入ることが「永遠のいのち」だと考えていた。
- ②一般的には、いつまでも続くいのちである。

* しかし、永遠のいのちとは、永遠に存在し続けることではない。

*すべての者は、永遠に存在し続ける。

*どこで、どのような状態で存在し続けるかが問題である。

③永遠のいのちとは、唯一のまことの神を知ること。

*「唯一のまことの神」とは、偶像を排除したことばである。

④そして、父が遣わされたイエス・キリストを知ること。

*ユダヤ的な一神教の枠組みに、子なる神の存在と贖いを組み込む構造。

*メシアニックジューにとっては、極めて重要なキリスト論的認識である。

⑤永遠のいのちとは、イエス・キリストを通して与えられる「神との平和」。

⑥「知る」とは、親密な個人的関係を指す動詞である。

⑦ユダヤ的には、「来るべき世」への参加が、「永遠のいのち」である。

⑧イエスによって、永遠のいのちは、今ここで始まる霊的リアリティとなった。

3. 4~5 節

Joh 17:4 わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上でああなたの栄光を現しました。

Joh 17:5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。

(1) イエスの自分自身のための祈りは、使命の完了を前提としたものである。

①イエスは、父がイエスに与えた使命を成し遂げた。

②十字架の死が確実なこととして語られている。

(2) イエスの願いは、受肉前の栄光への回帰である。

①世界が存在する前から、子は父といっしょに栄光を持っていた。

②受肉は、「メシアの辱め」の始まりである。

③十字架は、「メシアの辱め」の終わりである。

(3) イエスが栄光を求めた理由は、父の栄光が現れるためである。

①イエスは、受肉期間にご自身の栄光を隠された。

②山頂での変貌が、唯一の例外である。

③イエスは、父に従順に歩むことによって父の栄光を現された。

④神の義、力、愛が証明されることは、神の栄光につながる。

⑤人間の生きる目的は、神の栄光を現すことである。

⑥ロマ 11 : 36

Rom 11:36 すべてのものが神から発し、神によって成り、神に至るのです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

⑦1 コリ 10 : 31

1Co 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

⑦エペ 1 : 11~12

Eph 1:11 またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。

Eph 1:12 それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。

結論：今日の信者への適用

1. 「神の時」を認識する。

- (1) イエスは、十字架という最大の苦難を「神の時」として受け入れた。
- (2) 試練や困難の中にあっては、「神の時」を認識する霊性が求められる。

2. 「永遠のいのち」を今ここで味わう。

- (1) 永遠のいのちは、死後の状態ではなく、今ここで始まる神との交わりのいのち。
- (2) 「知る」は、親密で人格的な関係を表す。日々の「知り合う」歩み。

3. 主の栄光を現す生き方を選ぶ。

- (1) イエスの使命は、御父の栄光を明らかにすることであった。
- (2) 私たちの人生の目的も、神の栄光を映すことである。